



ステファニー A. アーチック
2024-2025年度 R1 会長



ROTARY INTERNATIONAL DISTRICT 2840
TAKASAKI SYMPHONY ROTARY CLUB
Symphony Weekly



No. 6

会長/President 白石 隆夫
幹事/Secretary 堀口 芳明
クラブ会報委員長/Committee Man of Weekly Report 発地 富士雄
第 3 週 2024年 8月23日 (金)
例 会 毎週金曜日
点 鐘 12時30分
例 会 場 マリエール高崎

事務所/Office

高崎市本町144-1 光明第7ビル202号室
T E L 027-328-3371
F A X 027-328-3372
<http://www.takasakisympphony-rc.org>
E-mail:sym@po.wind.ne.jp

事務局員/Office worker 浅見 洋子

本日のプログラム

ゲスト卓話
高崎市福祉部長(児童相談所担当) 中山 直美様

ロータリーソング 手に手つないで

第1232回例会報告

第2週 8月9日(金)
会場: マリエール高崎「ノースヴィラ」
プログラム
会員卓話「ゆうちよの商品・サービスについて」
発地富士雄君



御来訪者/Visitor 1名

米山奨学生 王 天順さん

出 席 報 告

会 員 数	46 名
出席計算人数	45 名
本日出席者	32 名
本日出席率	71.11%
先々週出席率	67.39%

幹事報告/Secretary Report

- ・神戸東灘RC週報
- ・ガバナー事務所 夏季休暇のお知らせ
- ・群馬いのちの電話だより、事業報告
- ・高崎市国際交流協会会報誌「ともだち」
- ・高崎観音山「万灯会」9月21日開催チラシ

米山奨学会奨学金(8月分)授与

- ・米山奨学生 王 天順さん



委員会報告/Committee Report

ニコニコBOX/Donator Niconico Box

白石 隆夫君 土屋 貴洋君 ビューエル芳子君
泉 省平君 井汲 憲治君

ロータリー財団BOX/Donator Rotary Foundation

白石 隆夫君 三浦 敦朗君 折田 慶太君
大久保伊津美君 八木建司朗君 西野 宏君
小野垣義男君

米山奨学会BOX/Donator Yoneyama Scholarship

吉井 弘子君 白石 隆夫君 折田 慶太君
長井 典夫君 柴崎 晟君 高橋 正光君
君島 准逸君

歌唱委員会

本日「歌唱」についてのアンケート配布しました。歌いたい曲などご記入ください。

親睦委員会

12/14の親睦イベント「くるみ割り人形」の参加者は50名となりました。ありがとうございました。

理事会報告/Board of Directors (Report)

(2024年8月9日、第6回(臨時))

- ・月見例会について…会場: ヴィラ・デ・マリアージュ、会費負担(クラブより3,000円、個人負担5,000円)、演目「Toujour、フルート奏者による演奏」で承認



次回例会予定

8月30日(金) 休会

9月6日(金) 月見例会

会場：ヴィラ・デ・マリアージュ高崎
(飯塚町800 Tel.027-365-4122)

受付：18:00～、点鐘：18:30

【歌物語②「赤とんぼ」】

2022年9月16日例会にて歌唱

歌唱委員 泉 省平

日本童謡の会が全国から募集した「好きな童謡」で、圧倒的な1位だったのが「赤とんぼ」でした。この歌は日本人の心を引き付けてやみません。

会場の皆さん、幼いころを思い出してみてもいいのです。5歳の時に突然、母親が家からいなくなり、自分だけがあとに残されたら、どんな気持ちになるだろうか。「赤とんぼ」を作詞した日本の代表的な象徴詩人、三木露風がそうでした。

露風の本名を操と言います。幼稚園から家に帰ると、玄関は板が斜めに釘付けされて中に入れなかった。戸を叩いて母の名を呼んでも、答えがありません。途方に暮れているところを祖母が迎えに来ました。

母は父と離婚し、まだ乳飲み子だった露風の弟を連れて実家に戻ってゆきました。長男の露風は一人残され、祖父母に引き取られた。顔を合わせれば取りすがらだろうからと、最後のひとこと母と話す事すら許されなかったのです。

露風の生家は兵庫県たつの市にあります。母の実家は山向こうの鳥取県にあるのです。少年露風は母が去って行った山道を駆け登った。それから毎日、幼稚園から戻ると峠まで登って鳥取県の方を見つめ、母が今にも帰ってくるかと待ち受けた。

行きはもしかして母に会えるかもしれないと期待に身を弾ませながら、そして帰りは今日も会えなかったと消沈してうつむき、泣きながら。

当時を思い起こして31年後に作った「桜の下」という詩があります。

おっかさん、どこへ行ったのか
桜の下で、待ってても
おっかさん、かえらぬ
どこへ、いた

露風は、31歳になると、クッキーで名高い北海道・函館のトラピスト修道院の文学講師に招かれ、敷地内の牧師館に住み込んだ。「赤とんぼ」の詩はここで作られた。

5歳で母と生き別れになったあと、母に代わって少年露風の世話をしたのは「姐や」と呼ばれる子守の娘だ。

「赤とんぼ」の歌詞の1番は、姐やの背に負われて赤とんぼを見た時のことを思い出してつづった。しかし、露風の頭に浮かんだのは姐やの背を通じて思い出す、母に負われた記憶ではなかったか。

母におんぶされたいという願いはもはやかなわない。そんな悲しみに包まれた少年の心をこの詩に感じる。

2番の「桑の実を小籠に摘んだ」桑畑は、今も生家のすぐ近くに残っている。

3番は意味深い。姐やは15歳になってお嫁に行った。そこで絶えた「お里の便り」とは、母が露風に知らせようとした自分の消息だ。離婚して家を出た母は露風に手紙を書きたかった。しかし、家制度の厳しい時代。いったん家を出た身に、それはかなわなかった。母は姐やに宛てて手紙を書き、その内容を姐やが露風少年に伝えた。

姐やが嫁に行ったため、その便りが絶えた。姐やを通じてかろうじて知ることが出来た母の消息は、ここでバツタリと途絶えた。露風は母とのつながりを突然断ち切られた。

孤独に陥った少年の身になれば、3番はとても切なく感じられる。

4番は露風が12歳の時に作った俳句だ。1番は「夕焼」と漢字だが、ここではひらがなの「夕やけ」となっている。12歳の時の俳句を大人になっても覚えているほど印象的だったのだ。それとまったく同じ情景を約20年後に北海道で見た露風。

竿の先の赤とんぼを見つめる心はその時、母を求める12歳の少年の心に返っていたのではないか。

